

文芸特集



たくさんの方々の力作の中から選ばれた秀作の一部を紹介します。限られた字数の中に織り込まれたさまざまな思いや季節の情緒を味わってみてください。

一席

覚めている浅蜷いるらし真夜中の流しにひそと息する気配

芝新町 荒木 信子

評 真夜中、覚めている浅蜷がちいさな物音をたてている。無論目覚めていない浅蜷もいるのである。こちら側では目覚めてしまっただけで眠れない作者がいて、ひそと息する「いのちの気配を聴いているのだ。」

戦中や戦後の飢えを忘れたり輸入魚介を日食ひをりて

川口一 川久保良治

噓せぬや、ふこぼさぬや、ふに促され今日のおやつサブレの甘さ

安行吉岡 會澤 光子

人前に一役終えしワイシャツも今は菜園作業着となる

安行慈林 吉川 正秀

五十五の息子の肩をい子ねと幼児のごとくすりやりたし

朝日3 高松 幸江

もんで洗う箸の手応えたしかなり娘等も交えし今宵の食卓

東本郷 石川能志子

撒いた豆拾い集めて食べ始め三日をかけて年の分だけ

安行原 高橋 清

弟も夫も亡くしたひなたぼこかげろうの中面影うかが

芝高木 森田富美子

おりあいをどこかでつけて過す日夕ぐれの風が身にしみている

里 柴田 境子

歳だから酒嵩減らされ気がつけば我がのぐい呑み妻の挿歯浸かる

領家3 森岡 賢吉

父母が背を丸くして耕した畑は猿の楽園となり

上青木3 廣瀬 和子

霜枯れの茎引き抜けばじゃが芋が季節はずれに育ちていたり

坂下町3 川名 佳子

年重ね身きれいにせんと心してウィッグひとつを買ってみようか

末広3 後藤 和子

歴史ある重き土蔵がゆつくりと歯車の上すべり行きたり

桜町6 藤波不二雄

居酒屋で一杯飲んで帰る道しやばん玉降る保育室より

本町一 知念 哲夫

壊れても惜しまれもせず捨てられるポイント集めてもらひし小鉢

榛松 木村 昌子

俳句

一席

はこべらや十年一日たる自慢

上青木一 鈴木 千鶴

評 十年一日ということは、あまり芳しい言葉ではない。しかしそれを逆手に取って自慢していると言うのだから、そこに世間の常識を打ち破った諧謔性がある。言葉を換えれば悟りの境地とも言える。

あるがまま毎日生きて水温む

本連一 太田垣登志乃

うぐひすの歓迎を受けウォーキング

上青木西2 大滝 徳美

つばくろや十字架の墓海を向き

本町二 大畑 光弘

スマホなど止めて見上げよ春の月

南鳩ヶ谷一 岡野 安代

咲き継いでここを浄土とせし侘助

西川口三 早乙女文子

海の日や遠くに磯の香波の音

南鳩ヶ谷二 高橋 節子

竹林の高きに陣地鳥の恋

川口一 小安 章代

空気ふと軽しと感ず春立ちぬ

前川二 長尾かおり

池の中のち繫いで眠る蝌蚪

差間 中田 道子

白杖の行く先々の風光る

戸塚二 春山ふみ子

歌垣の筑波はしるべ鳥帰る

小谷場 宗像とき子

汐留のビルの谷間に春の風

鳩ヶ谷緑町一 村岡トシ子

シヤボン玉真青の空に恋がある

領家二 矢作 恵

下萌の地をずかずかと測量士

西青木三 弓田 敏子

柔らかな言葉に潜む含み針

鳩ヶ谷本町三 加藤 レイ

評 親の意見と灸は後から効いてくる。は諺に知る所だが、標的の御仁の反応や如何に?起因の立場の差異は有れ、共感を誘う座語が一句の命脈。苦勞人ほど氣遣いの口調が重を突く。

幸せの定義何度かきかえる

元郷二 田口 公江

ケイタイが物言わぬ眼に変えていく

飯塚二 川瀬伊津子

晩年は汁粉の塩に徹する日

上青木四 星野 明美

一病を得て丸くなる喉仏

上青木西四 星野 良一

妬みから生まれた無駄は戻らない

東川口二 星野 直康

健脚の若さが広くする世界

安行領家 原澤かね子

椰子深きパラオの戦火墓碑に読む

川口四 富田千恵子

ノーベル賞土の中から探し出す

安行領根岸 堀口 弘一

花粉症雨に感謝の深呼吸

朝日五 堀 晋

振り込めの詐欺師を騙せ四月馬鹿

戸塚境町 稻垣 洋

短歌

金子富美子 選

川柳

新井 愁思 選

※文芸特集は年1度の掲載を予定しています。 次回の募集は広報かわぐちでお知らせします。

問い合わせ…広報課 ☎048-259-7628 FAX048-258-5661